生命を大切にする子どもの心を育てる保育者と看護者との協働への取り組み

益守かづき[1]・中野綾美[2]・佐東美緒[3]・矢野智恵・岡本幸江[4]・今西一實[5]・山﨑美恵子[6]

(2005年12月1日受付, 2006年1月23日受理)

Approach for cooperation between childcare workers and nurses to foster an understanding of the value of life in children

Kazuki MASUMORI[1], Ayami NAKANO[2], Mio SATO[3], Chie YANO, Yukie OKAMOTO[4], Kazumi IMANISHI[5] and Mieko YAMASAKI[6]

(Received : December 1, 2005. Accepted : January 23, 2006)

要旨

本研究は、看護者が保育者と協働することによって、どのように専門性を発揮し、“生命を大切にする子どもの心”を育てる関わりに貢献できるのか、検討することを目的とした。研究者の作成した自由記載方式の調査用紙を配布し、252名の保育者から有効回答を得た。データを分析した結果、保育者は、“生命を大切にする子どもの心を育てる”アプローチとして、子ども・家族・保育者との間に信頼関係を形成しながら、子どもに焦点を当てたアプローチ、親や家族に焦点を当てたアプローチ、子どもを取り巻く社会に焦点を当てたアプローチが重要であると考えていることが明らかになった。本研究結果から、看護者は、保育者と協働しながら、その専門性を発揮し、“生命を大切にする子どもの心”を育てるため、多くの役割を担う必要性が示唆された。

キーワード：生命の大切さ、思いやり、子ども、協働

Abstract

The present study aimed to investigate how nurses were able to cooperate with childcare workers in order to apply their expertise and to contribute in raising children who understand the value of life. A survey was conducted using an open-ended questionnaire prepared by the researchers, and valid responses were obtained from 252 childcare workers. Data analysis revealed that with regard to fostering an understanding of the value of life in children through the formation of trusting relationships among children, families, and childcare workers, childcare workers considered it to be important to take an approach that matches each the child, the parents and family, and the society surrounding the child. The results of the present study indicated that it was necessary that nurses cooperate with childcare workers in order to apply their expertise toward fostering an understanding of the value of life in children and to become extensively involved.

Key words : value of life, consideration, children, cooperation

---

1．高知女子大学看護学部看護学科　助教授　Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kochi Women's University
2．高知女子大学看護学部看護学科　教授　Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kochi Women's University
3．高知女子大学看護学部看護学科　助手　Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kochi Women's University
4．埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科　講師　Department of Nursing, School of Health and Social Services, Saitama Prefectural University
5．宇部フロンティア大学人間社会学部　教授　Faculty of Humanities and Social Sciences, Ube Frontier University
6．高知女子大学看護学科　名誉教授　Department of Nursing, Faculty of Nursing, Kochi Women's University

Ⅰ．はじめに

わが国におけるいじめや学級崩壊、少年犯罪などの子どもを取り巻く深刻な問題は、子どもが「死についての認識」や「生命の尊厳性」などを軽んじる風潮が影響していると考えられる[1)]。2002年、刑法犯で検挙された少年（14歳以上20歳以下）は、14万人を超え、人口比（同年齢層の人口1,000人当たりの検挙人員）でみると、16、7と、昭和41年以来、4番目に高い値を示している[2)]。中でも、人を死に至らしめる犯罪は153件発生し[3)]、社会に衝撃を与えている。また、自殺者は小学校・中学校・高校を合わせると134名で、家庭の事情や学校問題によって、自らの命を絶っている[4)]。これらの現象は、生命を軽視しがちな風潮の中で、子どもの共感能力が低下し、相手の立場で考えることが困難になっていること、生命を大切にすることができなくなっていることなど、子どもの心の健康に重大な問題が生じていることを象徴していると考えられる。

“生命を大切にする子どもの心”を育てる過程には、「思いやり」を育てることが必要である。思いやりの行動を説明する際、心理学領域においては、向社会的行動（＝愛他的行動）[5)]を用いて説明する[6)~8)]。向社会的行動について、①他者、あるいは他のグループについての援助行動である、②相手からの外的な報酬を得ることを目的としてはいけない、③行動には何らかのコストが伴う、④自発性が必要である、と菊池は述べている[9)]。幼児期における愛他的行動は、生活経験や訓練によって学習される学習性のものであり[6)]、動機付けの過程で共感性が必要とされる[5)6)]。共感性を支える一番基本的な認知能力は4、5歳頃から急速に伸びることが知られ[9)]、幼児期から共感性を育む関わりが重要となってくる。

以前、家庭では“生命を大切にする子どもの心”を育むことが、自然の流れの中で行われてきた。しかし、近年の少子化、核家族化、社会情勢の変化に伴い、家族機能は変貌を遂げ、家族の弱体化が指摘されるようになった[10)]。家庭だけのしつけでは、“生命を大切にする子どもの心”を育てることが難しいのが現状である。

“生命を大切にする子どもの心”を育てることは、現代の子どもの健康を取り戻し、次世代を担う健全な子どもを育成していく上で重要である。平成10年4月に文部科学省は、心の教育は幼児期からの取り組みが必要であるとして、「幼児期からの心の健康の充実」を、子どもを取り巻く社会全体・家庭・地域・学校に教育改革プログラムとして提示した[11)]。

また、生命を大切にする心の発達を育む取り組みは、学校教育にも取り入れられた。平成12年12月に教育課程審議会は、「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価のあり方について」の提言のひとつとして、行動記録の評価内容に、「生命尊重」を新たに加えた[12)]。

以上のことから、“生命を大切にする子どもの心”を育てるための取り組みは、幼児期から始める必要があり、子どもを取り巻くすべての者が一体となって取り組むべき課題であることが明らかになった。“生命を大切にする子どもの心”を育てることは、家庭内だけでは限界があり、このことは、家族機能の弱体化からも容易に推測できる。小児看護に携わる我々看護者が、専門職として果たすべき役割は、非常に大きいと考えられる。しかしながら、看護者は、“生命を大切にする子どもの心”を育てるため、果たすべき具体的方策を未だ見出せずにいる。

Ⅱ．研究目的

本研究は、現代社会の中で様々な問題を生じている子どもの心に、“生命を大切にする子どもの心”を育てるための、健康教育プログラムを構築することを目的とした調査研究の一部である。本研究の目的は、心の発達上非常に重要な時期である幼児期の子どもと、最も深い関わりを持つ専門職である幼稚園教諭及び保育士（以下保育者と表す）が、①“生命を大切にする子どもの心”を育てるため、どのようなアプローチを展開している

のか、その実態を明らかにすること、②本研究の結果から、看護者が保育者と協働することによって、どのように専門性を発揮し、“生命を大切にする子どもの心”を育てる関わりに貢献できるのかを検討することとした。

Ⅲ．研究方法

1．対象者の選択

人口80万規模の地方都市であるA県内の市立保育園、民営保育園及び幼稚園に勤務する保育者を対象とした。各施設については、A市子ども課（市立保育園）、A県保育者会長（民営保育園）及び私立幼稚園連合会会長（幼稚園）より紹介していただいた。研究の目的、研究方法、研究の具体的内容について説明した後に、同意の得られた保育所57施設・幼稚園19施設でデータ収集を実施し、その施設で勤務している保育者すべてを対象とした。

2．データ収集方法

研究への協力が得られるかどうかを確認した後、了承の得られた施設にアンケート用紙を配布した。同意の得られた対象者には、回答後、無記名で返送していただいた。生命を大切にする子どもの心を育む中で、保育者の取り組み・関わりについて、自由記載による質問を設定した。

3．データ分析方法

自由回答で記載された質的データについては、ＫＪ法により分析した。分析過程では、１人の保育者がいくつかのアプローチを重複して展開していたため、アプローチの最小単位を数え、延べ件数として表示している。分析には、看護学を専門とする研究者４名と教育学・心理学を専門とする研究者１名が参加した。

4．倫理的配慮

A市子ども課（市立保育園）、A県保育者会長（民営保育園）及び私立幼稚園連合会会長（幼稚園）より紹介していただいた施設に対して、文書、および、口頭で研究の趣旨を説明し承諾を得た。承諾を得た施設の保育者に対しては、それぞれ①本研究で得た情報は、本研究以外の目的で使用することは一切ないこと、②調査結果は無記名で回収し、個人が特定できないように処理を行い、専門の学会、学術雑誌に公表することがあること、③研究に協力しない場合でも、不利益を被ることがないこと、④研究への参加は任意であることを文書で説明し、アンケートを配布させていただいた。

Ⅳ．結　　果

1．対象者の特徴

252名の保育者（保育士・幼稚園教諭）より有効回答を得た。年齢分布、性別、職位は表１のとおりである。

表１．保育者の背景

		対象者数(人)	(%)
年齢	～29歳	49	31.4
	30～39歳	50	19.8
	40～49歳	77	30.6
	50～59歳	42	16.6
	60歳～	4	1.6
職位	園長	17	6.7
	主任	37	14.7
	保育士・幼稚園教諭	184	73.0
	その他	14	5.6

2．生命を大切にする子どもの心を育てる保育者のアプローチ

得られたデータをKJ法により分析した結果、生命を大切にする子どもの心を育てるアプローチとして、保育者は、子ども・家族・保育者との間に信頼関係を形成しながら、子どもに焦点を当てたアプローチ、親や家族に焦点を当てたアプローチ、子どもを取り巻く社会に焦点を当てたアプローチが重要であると考えていることが明らかになった。

1）信頼関係の形成

保育者は、生命を大切にする子どもの心を育てるアプローチとして、「保育者と子ども・養育者との間に信頼の和をつくることが重要である」と回答していた。

2）子どもに焦点を当てたアプローチ

子どもに焦点を当てたアプローチとして、生命を大切にする心の素地に働きかけていく【子どもの心を育む】と、生命の大切さについて直接的に働きかけていく【生命の大切さを教える】が抽出された。

(1)【子どもの心を育む】アプローチ

生命を大切にする心の素地に働きかけていく、【子どもの心を育む】アプローチとして、表2に示す7つのアプローチが抽出された。

表2.【子どもの心を育む】アプローチ

アプローチ	のべ件数
(a) 子どもを尊重する	17件
(b) 子どもの心に共感する	2件
(c) 子どもの生活を整える	8件
(d) 子どもと一緒に遊ぶ	3件
(e) 生きるすばらしさを伝える	7件
(f) 他者の思いをわかることができるように関わる	23件
(g) 子どものモデルになる	5件

(a) 子どもを尊重する

保育者は、日々子どもの集団に関わる中で、一人ひとりの《子どもを尊重する》ことを毎日積み重ねることにより、【子どもの心を育む】アプローチを展開していた。

たとえば、「とにかく子どもを受け入れる。集団生活の中で、そして一人の人間としての“しつけ・社会化”を身につけさせる。やさしく抱いたり、時には叱ったり・・・毎日の積み重ね」「子ども一人ひとりの存在を大事にし、そのことを伝えていく」「生命を大切にすることは、やさしさを育むことである。自然の関わり、友人との関わりの中で幼児一人ひとりを人格として認め、その気持ちを受容・自己実現の理解につとめ、必要なことを気長にわかるように話してやることを大切にしている」「周りを大切にできるようになるためには、まず、自分自身を認め、自己肯定感が高まる環境を見出し、自分と同じように周りの「いのち」を大切にできるようになってくれたらいいなあと感じています」「愛情を持って接する。しかる時も誉める時も。子どもに接する事が大切、人を大切にする事を学ばしたいのなら、一人ひとりに接する時に“あなたが大切だ”という思いで接する事が大事だと思う」などである。

このように、保育者は、生命を大切にする子どもの心を育む上で、一人ひとりの子どもを尊重するアプローチを積み重ねていくことが重要であると考え、子どもを尊重するアプローチを通して、一人ひとりの子どもが唯一の存在であり、大切な存在であることを伝えていた。

(b) 子どもの心に共感する

保育者は、子どもの中に生じている様々な感情に添い、《子どもの心に共感する》ことにより、【子どもの心を育む】アプローチを展開していた。

たとえば、「子どもの何気ない言葉や行動を大人が察知して、一緒に共感したり育てたり、話したりしながら生命を大切にする心を育てていけたらいいと思う」「悲しい、痛い、うれしい、辛い、淋しいなど、その場で自分の感情に気づかせ、その感情・気持ちを受けとめていくようにしている」などである。

このように保育者は、子どもの心の動きをキャッチし、子ども自身が自らの感情に気づくことができるように援助して共感することにより、様々な感情を抱いて良いことを体験を通して子どもに伝えていた。

(c) 子どもの生活を整える

保育者は、子どもが生活の中で、生活習慣を身につけ、達成感やゆとりを獲得できるよう、生命

を大切にする心とともに、物を大切にする心を育てることができるよう、《子どもの生活を整える》ことにより、【子どもの心を育む】アプローチを展開していた。

たとえば、「達成感がもてる生活を構築する」「日々の生活がもっとゆっくりゆったりできればよいと思う」「自分も（命を含め）大事にし、友達を大事にできるようにしていきたい。そのためには年齢なりの生活習慣を身につける」「生命を大切にする心とともに物を大切にする心も育てなくてはならないと思う」などである。

このように、保育者は、日常生活の中で子どもが生活習慣を習得し、生活の中で自分のみならず、友達や物を大切にできるように援助することにより、生命を大切にする子どもの心を育てていた。

（d）子どもと一緒に遊ぶ

保育者は、子どもが遊びを通して感動し、自分自身を伸びやかに発散し表現することができるよう、《子どもと一緒に遊ぶ》ことにより、【子どもの心を育む】アプローチを展開していた。

たとえば、「一緒に遊ぶ中で感動や共感を大切にする」「遊びや生活を共有することにより、共感する機会を多く持つようにする」「就学前まではとにかく泥んこ遊びを通して、のびのびと自分を表現することが大切だと思います。何よりも太陽と、水が大好きな子ども達ですので、泥んこ遊びを通して体中を使って、まずは、自分自身を発散させ、だんだんと年齢に応じて友だちとの関わりの中で泥遊びをしていく事が出来れば、きっと、学校に上がってもその土台が生きてくるのでは…。生命の大切さまでは、行かないかもしれませんが、充分遊び込む力のある子は友達との関わりもスムーズになると思います。なるだけ園にいる間はダイナミックにのびのび遊ばせてあげたいです」などである。

このように保育者は、遊びにより子どもが自己表現できるように、さらに友達との関係を築くことができるように援助することにより、生命を大切にする子どもの心を育てていた。

（e）生きるすばらしさを伝える

保育者は、子どもが日々の生活体験を通して、可能な限り《生きるすばらしさを伝える》ことにより、【子どもの心を育む】アプローチを展開していた。

たとえば、「まず“生きることはすばらしい”という体験を多くさせたいと考えています」「できるだけいろんな体験をさせること」「いろいろいな人々との交流がもてる機会を作ってあげる。知育よりも、楽しかった、またやりたいと思えるような活動を心がけている」などである。

このように保育者は、日常生活の中で子どもの生活体験が豊かになるように環境を整えたり、場をつくることにより、生命を大切にする子どもの心を育てていた。

（f）他者の思いをわかることができるように関わる

保育者は、子どもが集団の中で互いに他者の思いを理解し、また、他者に自分の思いを伝えることができるよう、《他者の思いをわかることきができるように関わる》ことにより、【子どもの心を育む】アプローチを展開していた。

たとえば、「友達と周りの中でのトラブルの際には、相手の思いが伝わるように保育者や周りの大人が関ることが大事だと思う。（入りすぎることのないように一定見守りながら）」「お友達と関わっていく中で、けんかした時など、なぜどうしてそんなにしたのかとか、両方の話を聞いてやり注意していく（２歳児担当なので）」「友達の気持ちになって考えることや、子ども達の思い、共感すること、トラブルになった時、友達の想いを上手く伝えたりするような関わり」「日々の生活の中で、お互いの人権を大切にする上で、いろいろなトラブルも見過さず、場面に応じて仲介役になっています」「自分の思っていることを相手にはっきり言えるようにする。相手の話を聞けるように

する」「“生命を大切にする”という人として最も大切であることにはまだ深く触れておりません。しかし、“お友達に対して、自分が嫌だなと感じることがあればすぐ暴力を振るうのではなく、自身の感じたことを言葉でお友達に伝えようね”ということは、常々子ども達には言葉掛けています。私としては、そのようなことも“生命を大切にする子どもを育てる”ということにつながるのではないかな、と考えております」「お友達との関わりの中で危険な事や相手の気持ちを伝え、人の身になって少しでも考えられるように言葉掛けをしている」などである。

このように保育者は、子どもたちが互いの思いを理解できるように仲介役となり、子どもの思いの表出や、子どもの理解を援助していた。

さらに、「保育現場ではその子の年齢に合わせ，その年齢なりに自分の生命を守っていけるように遊びや生活の中でのその場面を捉え、必要な言葉掛けや援助をしたりしています。2～3歳児は物を投げたり友達を押したりすることが多い。危険なこと、また人にあたった時、相手の表情を見せながら話をすすめ、次への行動に結びつけていく。年齢によって指導の仕方が違います」というように、保育者は年齢により子どもへのアプローチの仕方を変えている。

(g) 子どものモデルになる

保育者は、子どもが大人を模倣しながら、他者への関わりや思いやりを学んでいくという、発達段階上の特徴を考慮し、《子どものモデルになる》ことにより、【子どもの心を育む】アプローチを展開していた。

たとえば、「0・1歳児というとまだまだこれからいろんなことを吸収していく段階の状態なので言葉遣いにしても、関わり方にしても保護者や親をそのまま真似してくれます。そのため私たち保育者は十分気をつけていないと私達の分身のような子ども達になってしまうと思うのです」「赤ちゃんが生まれた子がいたら他児にも知らせ、お兄ちゃん、お姉ちゃんになったことを喜び、その赤ちゃんにも登降園時に会えたら見せてもらったりする。主に0歳児のクラス（0・1・2歳児＝乳児の子）には優しく接す。（小さい子には優しくしてねということです）」などである。

このように保育者は、まず自らが子どものモデルになることにより、他者にどのように関わっていくのか、他者を大切にするとはどのようなことかを、言葉ではなく行動で伝えていた。

(2) 【生命の大切さを教える】アプローチ

生命の大切さについて直接的に働きかけていく【生命の大切さを教える】アプローチとして、表3に示す2つが抽出された。

表3．生命の大切さを教えるアプローチ

アプローチ	のべ件数
(a) 生物・自然とふれあう体験を提供する	29件
(b) 生命・健康の大切さの理解を促す	

(a) 生物・自然とふれあう体験を提供する

保育者は、生物や自然とふれあう生活体験が少なくなっている子どもに対して、《生物・自然とふれあう体験を提供する》ことにより、【生命の大切さを教える】アプローチを展開していた。

たとえば、「どれだけ繰り返し話を聞かせても、やはり実体験が伴わないと、子どもなりに捉えることは難しいと思う。小さな虫や花など何でもいいので、実際に育てたり、また、死を体験させることが大切だと思う」「園では小動物の飼育や、植物を育てるなど、“いのち”を感じられる活動を取り入れ、体験することを大事にする」「動・植物にはすべて終わりがあることを子どもに知らせていく」「地鶏の世話やひよこ誕生後の世話をする。おたまじゃくしを捕り、大切に育てる。死んだ時にはお墓に埋めるなど、保育の中で共に体験させながら、会話を大切にする」「園で小動物や植物の世話をする環境が充実しているので、実際体験していく中で話をしたり」「自然の変化、

動植物との関わり、いろんな年齢の人と話したり、関わったりすることで、何気ないことがやさしさにつながったり、発見につながったりしていくように思える」「やはり、保育所では目に見える自然、身体で感じる感覚等を養う機会を多く持つことや、そして、季節の移ろいを通し、生きているものには全て命があり、そして、花は枯れる。しかし、また季節が来ると共に花開くということを教えると同時に、実生活の中では、物を大事に使う、片づける、優しく扱うなどをまずは教えていかなければならないと思っています。年長・年中になれば、その土台が出来ていれば、人の誕生、死等もおぼろげながら分かって理解でき、また、戦争体験の話も理解でき、命の大切さもわかると思います」などである。

保育者は、動物や植物の世話を実際に子どもができる環境を整え、子どもに生命を体験させること、あるいは、子どもに生命には限りがあり、死が訪れることを体験を通して伝えていた。また、「保育園の夏の行事で夕涼み会（夏祭）をしていますが、その中で、金魚すくいを毎年しています。以前は、ほぼ全員の園児が金魚すくいを希望していましたが、年々、“飼えない”“すぐ死ぬのでやらない”との理由で希望者が減っています。核家族が増え、子ども達の身近な人が死ぬという場面も減っています。その分、小動物等飼って、大切に育て、その死に遭遇し、生命の大切さをわかって欲しいのですが、現状は悲しいものです」というように、子どもに生物・自然とのふれあいを通して生命を大切にする心を育んでいくことの難しさを語っていた。

(b) 生命・健康の大切さの理解を促す

保育者は、子どもにわかるように具体的な例を示しながら、《生命・健康の大切さの理解を促す》ことにより、【生命の大切さを教える】アプローチを展開していた。

たとえば、「子ども自身の心と身体の健康が大切なことを本人や保護者に理解してもらう（生活リズムを整えるなど）」「生きていくことが一番、命が一番、そのためには危ないことをしないこと、血の出ること、救急車で病院に行くのが一番嫌なこと（5歳児担当）を、4月に子どもに話しています。子ども達もそのことをよくわかり、子ども達で考えたり、話したりして危ないことを注意しあっているようです」「生命は大人も子どもも平等（同じ重さ、同じレベル）であること。トラブルが起こった時にケガだけではなく、生命を亡くすこともあるという話をしている」「保育者はもちろんのこと、友達や保護者、みんな一人ひとりが、自分の命をも大切にし、また、人の命を大切にしていく事が一番だと思います」などである。

このように保育者は、子どもに直接的に生命の大切さを言葉や態度で教えている。

3）親・家族に焦点を当てたアプローチ

親・家族に焦点を当てたアプローチとして、表4に示す4つが抽出された。

表4．親・家族に焦点を当てたアプローチ

アプローチ	のべ件数
(a) 親・家族の果たす役割を重視する	9件
(b) 親の心をリラックスさせる	1件
(c) 過保護・過干渉に気をつける	1件
(d) 親と子の関わりの大切さを伝える	1件

(a) 親・家族の果たす役割を重視する

保育者は、生命を大切にする子どもの心を育む中で、《親・家族の果たす役割を重視する》アプローチを展開していた。

たとえば、「愛情を受けて育つこと」「母親が仕事を持っているので小さい頃から（産休明けとか）託児所に預けられている子が多くなっている。保育料が乳児の間は高いため、3歳児になって入園する子も多いので、そういう子に問題を感じる子が多い。乳児期のスキンシップの多い子、愛されて育てられてきた子はやさしい言葉が友達にもすぐかけられるし、動物や小さい子にもやさしい」

「まず家庭がしっかりしていることが一番だと思います。子ども中心の生活を大人がしてあげなければならないと思います。すると自然と生命の大切さや人への思いやりはできてくると考えています」「私は、今自分に3歳の子どもがいます。集団の中で子どもの心を育てる事も大切にしていますが、まず一番大切なのは、家庭という小社会だと考えています」などである。

保育者は、子どもにとっての親（特に母親）、家庭という小社会を重要であるととらえ、これらが適切な役割を果たせば、生命を大切にする子どもの心は育ち、人への思いやりも育つと考えていた。

(b) 親の心をリラックスさせる

保育者は、子育てに戸惑いストレスを感じている親に対して、《親の心をリラックスさせる》アプローチを展開していた。

たとえば、「今のお母さんは子育てに非常に戸惑い、どうしたらいいのか分からず、子育てにストレスを感じているように思います。まずお母さんの心をリラックスさせ、お母さん・お父さんを通して、自然とそういう気持ちを育てていければと思っています」がある。

保育者は、まず、親の心をリラックスさせ、親が子どもに対して、生命を大切にする子どもの心を育むアプローチを展開できるように援助していた。

(c) 過保護・過干渉に気をつける

保育者は、生命を大切にする子どもの心が十分育つよう、《過保護・過干渉に気をつける》アプローチを展開していた。

たとえば、「少子化の現在、家庭では子どもは、大変大事にされて育っていると思われます。ともすれば、我慢する気持ちや他人の痛みに無関心な子どもになってしまいます」がある。

保育者は、両親に対して、過保護・過干渉に気をつけるように促すことで、生命を大切にする子どもの心を育むアプローチを展開できるように援助していた。

(d) 親と子の関わりの大切さを伝える

保育者は、生命を大切にする子どもの心を育てていく上で、《親と子の関わりの大切さを伝える》アプローチを展開していた。

たとえば、「親と子の関わりの大切さを、保護者にしっかり伝えていくこと」がある。

保育者は、両親に対して、はっきりと両親と子どもとの関わりが重要で、そのことが、生命を大切にする子どもの心を育むアプローチとなると考えていた。

4）子どもを取り巻く社会に焦点を当てたアプローチ

子どもを取り巻く社会に焦点を当てたアプローチとして、表5に示す3つのアプローチが抽出された。

(a) お互いに関わり合える地域社会をつくる

表5．子どもを取り巻く社会に焦点を当てたアプローチ

アプローチ	のべ件数
(a) 子どもを尊重する	17件
(b) 子どもの心に共感する	2件
(c) 子どもの生活を整える	8件

保育者は、生命を大切にする子どもの心を育てていく上で、《お互いに関わり合える地域社会をつくる》ことを重要であると考え、子どもにも地域社会の大切さについて気づかせていくようアプローチを提供していた。

たとえば、「地域がお互いに関わり合える環境があれば、家庭に老人がいなくても近所のお年寄りとの交流の中でもいたわり、やさしさ、思いやりが生まれてくると思う。そのことが、親しく声をかけてきた老人が見えなくなった時、心配して

あげたりの気持ちも生まれ、そのことから健康についてや生命についてなど、少しずつ感じていくのではないかしら」「今の自分があるのは親がいて、社会があり、人と人とのつながりがあってこそだと気づかせていく」などである。

(b) 子どもを心豊かに育てる地域社会をつくる

保育者は、生命を大切にする子どもの心を育てていく上で、《子どもを心豊かに育てる地域社会をつくる》ことの重要性を指摘し、保育者が親や地域と共に子どもを育てていきたいとアプローチを展開していた。

たとえば、「知育、学歴優先の社会のあり方が、バスのっとり事件や青少年の事件、問題行動の根底に大きく影響していると思います。乳幼児期に素直に心豊かに子育てできる大人社会を作りかえていかなくては…と思っています」「保育者が保護者の手助けとなり、みんなで子ども達を成長させていかなければいけないと思っています。保育者だけが張り切っていてもいけないし、保護者と子どもの関わりが欠けることなく地域ぐるみで温かく育てていきたいです」「自然の中で体を動かして遊ぶ中から、色々な事が学べると思うのでそういう環境を取り入れる事が大切だと思う。お年寄りの方とふれあう機会を多く持つ事が大事だと思う」などである。

(c) 生命を大切にする文化を創る

保育者は、生命を大切にする子どもの心を育んでいく上で、《生命を大切にする文化を創る》こと、子どもにその文化を伝えていくことが重要であり、《生命を大切にする文化を創る》アプローチを展開していた。

たとえば、「想像力の育つ文化（絵本、紙芝居、人形劇、音楽、実際の体験に基づく言語能力、映像）を伝える」「テレビやビデオで他人のことをあざ笑ったり、相手の気持ちを考えない場面が多く放映されているが、やめるよう国の方針として内容を点検し、きちんと製作者に意見書を出していくべきと思う。現在、野放し状態で恐い。それを毎日見ている子どもの育ちを守っていきたい」などである。

V. 考　察

本研究結果から、保育者は、子ども・家族・保育者との間に信頼関係を形成しながら、子どもに焦点を当てたアプローチ、親や家族に焦点を当てたアプローチ、子どもを取り巻く社会に焦点を当てたアプローチを通して、“生命を大切にする子どもの心”を育てる役割を担っていた。日常生活の中では、主に「生」を中心とした生命とのふれあいを大切にし、他者への思いやりを言葉や態度を通して子どもたちに伝えているということが明らかとなった。生命の大切さを感じるのは知識でなく感性であり、それは、体験を通して自ら感じ取るほかなく[13]、こうした専門職としての保育者の関わりは、健全な子どもを育成していく上で、非常に重要な役割を果たすと考えられる。

ここでは、前述した保育者の役割を踏まえ、看護者が保育者と協働することによって、どのように専門性を発揮し、“生命を大切にする子どもの心”を育てる関わりに貢献できるのか検討する。保育者と看護者が協働する場面は広く地域社会にまで及ぶが、今回は、入院している子どもに関わる看護者と病棟の保育者との協働について焦点を絞り考察する。考察では、1）信頼関係の形成、2）子どもに焦点を当てたアプローチ、3）親・家族に焦点を当てたアプローチ、4）子どもを取り巻く社会に焦点を当てたアプローチについて、今後の可能性と課題の検討を行う。

1）信頼関係の形成

保育者は、“生命を大切にする子どもの心”を育てるため、両親との信頼関係の形成が重要であると考えていた。看護師にとっても、両親との信頼関係の形成は、治療や処置を行う上で、非常に重要であると考えられている。しかしながら、そ

こでは、“生命を大切にする子どもの心”を育てるために重要であるという考えは、薄かったように感じられる。入院中には、健康や死に関して、普段経験しないようなことを経験することがある。このときに、看護者は、保育士と協働し、子どもを含めて両親との信頼関係を結ぶことによって、生命について語り合い、“生命を大切にする子どもの心”を育てることが重要である。通常、死については、忌み嫌う場合が多く、語り合うことは少ないが、両親と共に取り組む課題となるであろう。

2）子どもに焦点を当てたアプローチ

保育者の子どもに焦点を当てたアプローチとして、生命を大切にする心の素地に働きかけていく【子どもの心を育む】アプローチと、生命の大切さについて直接的に働きかけていく【生命の大切さを教える】アプローチが抽出された。

突然の入院は、子どもに、精神的な不安定さや混乱を引き起こす[14]。このような入院生活においても、子どもは大人からの適切な援助があれば、置かれた状況の中で、情報を模索し、遊びなどを通した対処行動[15]をとることができる。看護者は保育者と協働し、【子どもの心を育む】アプローチとして、「子どもの権利に関する条約」を遵守することはもちろん、痛みや苦痛に関する共感を示し、プリパレーション（心の準備）を通して、入院生活を整えていく必要がある。また、入院中の同室児間では、お互いを支えあいながら生活する場面が存在する。現状ではほとんど介入されていないが、保育者とともに、“生命を大切にする子どもの心”を育てる関わりとして、看護者は入院中の子ども同士の関係に目を向け、積極的な関わりを意識的に持つことが必要とされる。子どもによっては、慢性疾患によって、今後長い期間を疾患と共に人生を歩む子どももおり、病気を持ちながらも地域で生活することが必要とされることもある。健康であることの喜びを子どもに語る保育者と、病気を抱えながらも、より良く生活できるように、地域での子どもの生活に看護者が支援を行うことも、重要と考えられた。また、入院中の子どもは、普段、両親とのかかわりの中で習得する社会性を、看護者や保育者の行動から習得する場合も多い。看護者と保育者が協働し子どものモデルとなれるよう、日々の中で関わりを持つことが重要であり、特に、入院中の子どもと関わる時間の長い看護師は、思いやりを忘れず、子どもたちと接する必要があろう。

保育者や看護者は、入院中には、「死」に直面する場面も考えられ、普段語られることの少ない「死」を子どもが受けとめることもある。保育者と看護者は、子どもと向き合い、命の大切さや生きる喜びを伝えるとともに、友だちや家族の死についてDeath educationへも関わり、【生命の大切さを教える】重要な場面へ遭遇する機会も多く存在する。保育者と看護者は協働し、死の場面でどのように子どもと向き合うのか、今後の課題となるであろう。

3）親や家族に焦点を当てたアプローチ

保育者は、生命を大切にする子どもの心を育む中で、《親・家族の果たす役割を重視する》、《親の心をリラックスさせる》、《過保護・過干渉に気をつける》、《親と子の関わりの大切さを伝える》などのアプローチを展開していた。

まず、子どもがすこやかに成長・発達を遂げるために、保育者と看護者が家族へのアプローチすることは欠くことができない。子どもは、親や家族に養護され、成長・発達を遂げる。これは、子どもの有する権利の一つであり、社会で自立するまでの間、身体・心理・社会面のどれを取っても、家族との関わりが重要となってくる。家族機能は、健康な形態である場合もある。しかし、一つ間違えば、家族機能が崩壊し、子どもにとっての最善となる家族が存在できなくなる可能性がある。複雑で殺伐とした現代社会では、家族機能が果たせず、虐待などといった事態に陥るケースも少なくない。看護者と保育者は、《親・家族の果たす役

割を重視する》ことを行いながら、家族のアセスメントを繰り返し、子どもにとって最善の家族機能が存在するのかを見極めていく必要がある。専門職者として、常に《親と子の関わりの大切さを伝える》ことを行い、子どもの病気や入院によって、変容を遂げる家族機能に注目し、支援していくことが重要であると考えられた。

また、病気を抱える子どもに寄り添う《親の心をリラックスさせる》ことは、子どもに与える影響も大きく、子どもの治療が十分に行われるよう、家族へのアプローチが重要となってくる。入院中にも、日常行ってきた親の子どもへのしつけなど、社会に適応するために必要なことを支持し、《過保護・過干渉に気をつける》関わりが重要と考えられた。看護者と保育者の役割を明らかに分担することはできないが、お互いが情報交換[16]を行いながら、“生命を大切にする子どもの心”を育てるため、両親の役割が重要であることを認識し、アプローチしていく必要があろう。

4）子どもを取り巻く社会に焦点を当てたアプローチ

保育者は、生命を大切にする子どもの心を育てていく上で、《お互いに関わり合える地域社会をつくる》、《子どもを心豊かに育てる地域社会をつくる》、《生命を大切にする文化を創る》といったアプローチを展開していた。

核家族化が進み、子どもたちが塾通いをする現代では、地域で子どもを見守るということがなくなってきた。そこで保育者は、《お互いに関わり合える地域社会をつくる》、《子どもを心豊かに育てる地域社会をつくる》、《生命を大切にする文化を創る》といった広く社会に、子どもたちの“生命を大切にする子どもの心”を育てるアプローチを展開していた。このことは、病院の中でも同じことが言えるのではないだろうか。病気を抱えながら入院している子どもの両親は、他の子どものことには関心が薄いかもしれない。しかし、他の家族を通して入院生活の中で見える、自分たちの育児について振り返り、これからの生活を捉えなおす機会となる可能性もある。相互関係[17]の中で、子どもの心を豊かにする入院環境が整えられるよう、看護者と保育者は協働していく必要があろう。病棟の中は、一つの社会であり、看護者と保育者の社会としての捉えが重要である。

Ⅵ．謝　辞

研究にあたり、調査に協力してくださいました保育者の皆様に深謝いたします。また、本研究は平成11・12・13年度科学研究費補助金の助成により行いました。

参考・引用文献

1）佐藤比登美，齋藤小雪：現代子どもの死の意識に関する研究，小児保健研究，58（4），515－526，1999.
2）社会法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所編：文部科学省初等中等教育局「生徒指導上の諸問題の現状と文部科学省の施策について」，日本の子ども資料年鑑2004，332，KTC中央出版.
3）社会法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所編：警察庁生活安全「：少年非行の概要」，日本の子ども資料年鑑2004，334，KTC中央出版.
4）前掲1）P354.
5）原野広太郎，小嶋秀夫，宮本美紗子他編集：児童心理学の進歩1985年版，219－246，平井誠也，浜崎隆司，第9章向社会的行動，金子書房，1985.
6）祐宗省三：幼児期における愛他的行動（一），児童心理37（10月号），1920-1922，1983.
7）祐宗省三：幼児期における愛他的行動（二），児童心理37（11月号），2092-2105，1983.
8）祐宗省三：幼児期における愛他的行動（三），児童心理37（12月号），2279-2294，1983.
9）菊池章夫：向社会的行動の発達，教育心理学年報，第23集，118-127，1983.

10）大日向雅美：家族の揺らぎと親の惑い，小児保健研究，58（2），155-159，1999.
11）文部科学省広報部：第993号，平成10年5月29日.
12）宮川八岐：「生命尊重」の教育の充実―学校・授業づくりの「5つの視点」―，初等理科教育No440，10-13，2003.
13）工藤隆継：生と死をどう扱うか，初等科理科教育，30，32 - 35，1996.
14）村田恵子：病気経験が子どもに及ぼす影響とストレス対処過程，病と共に生きる子どもの看護，メジカル出版，12 - 26，2000.
15）平林優子：保育士との連携，小児看護，27（5），640-645，2004.
16）中田尚子：医療従事者および他職種との連携，小児看護，27（5），634-639，2004.
17）筒井真優美：入院している子どもどうしのかかわり，小児看護における技，南江堂，2003.